

〔研究ノート〕

リゾートウエディングの地としての軽井沢の軌跡

—国際避暑地誕生とキリスト教会結婚式に注目して—

今井重男

1. 緒言
2. 高原都市・軽井沢の概要
3. 国際避暑地を拓いた外国人宣教師
 3. 1. A.C. ショーの軽井沢訪問
 3. 2. 宣教師らの別荘での避暑生活
4. 教会結婚式の始まり
 4. 1. 聖パウロ・カトリック教会の設置
 4. 2. 教会結婚式の発祥地
 4. 3. カテキズムと開かれたキリスト教の関係
5. 結言

1. 緒言

人間は結婚式を含む様々な儀礼を通して生涯を過ごす。これらの諸儀礼を「人生儀礼」、
「冠婚葬祭」などと称してきた。冠婚葬祭は、帯祝いや宮参りなどの子どもの誕生に関係
するもの、成人式や厄年、還暦など年齢よって行われるもの、死を見送る葬送関連、そし
て伴侶を得る結婚に関わるものなどに分けられる⁽¹⁾。そしてこれらの冠婚葬祭は、一般的
に生活地で行われるが、リゾートウエディング⁽²⁾はそうではない。

結婚式をどこで挙げたか説明する際、生活地の挙式は「帝国ホテル」とか「明治記念館」
など施設名称を語るのに対し、リゾートウエディングの場合は「ハワイ」や「軽井沢」と、
地域の名前が結婚した場所をあらわすこともある。

このように、リゾートウエディングは地域と大きくかかわりがあるが故に、地域と切り
離してそれを語ることはできない。しかし地域は様々あり、これを考察する場合は相当数
の地域をあたる必要が出てくる。しかも、単純に物理的空間を意味するものでもない。地
域について考察しようとするれば、歴史という時間軸を含めながら、自然的要因、社会的要
因、文化的要因など、いくつもの変数を考慮しなければならないと認識するが、目下のと
ころわれわれの研究ではそこまで及ぶ状況ではない。については本稿は、研究ノートとして、
その一歩を踏み出すべく、リゾートウエディングが盛んな軽井沢に焦点をあて論述するも

(1) 八木透『日本の通過儀礼』思文閣、2001年、i頁。

(2) 本稿では、結婚式を挙げるための、カップルおよび列席者の結婚式旅行を伴う結婚式スタイルをこう呼ぶ
ものとする。ゼクシィのリゾートウエディングガイド(2013)では、「移動する距離も、風景の美しさも、
…非日常の空気に包まれる。その気分こそが、リゾートウエディング」であると解説している。

のである。

1951年⁽³⁾に公布された国際親善文化観光都市建設法は軽井沢を「世界において稀にみる高原美を有し、すぐれた保養地であり、国際親善に貢献した歴史的実績を有する」と規定している。全国に点在する避暑地やリゾート地の中でも、この街は独特の評価を得ている。利用者に外国人が多く、学者や文士が住んだために、贅沢で高級な土地のように見られがちかも知れないが、歴史的には決してそうと限らない。

現在、軽井沢には年間780万人弱の観光客が訪れ、推定6,000組以上のカップルが結婚式を催すリゾートウエディングの聖地となっている⁽⁴⁾。結婚式のガイドブック『ゼクシィ 国内リゾートウエディング完全ガイド』では、「大人ガールは軽井沢で決まり」というキャッチコピーで特集されているくらいである。同ガイドで取り扱うリゾートウエディングエリアは、北海道、那須、伊豆・箱根、軽井沢、信州アルプス、湘南、京都、沖縄などであるが、特集とレギュラーの合計頁数が軽井沢は44頁ともっとも多い。また、こうしたガイドを調べてみて、軽井沢が他のエリアと大きく違う点があることに気付く。それは、結婚式を執り行う会場として、本稿でも注目する“本物のキリスト教会”といわゆる結婚式専用教会⁽⁵⁾が混在して案内されていることである。

結婚式専用教会の多くが、「軽井沢白樺高原教会」や「軽井沢 光のチャペル ピエールマティアード」など、わざわざ軽井沢の地名を冠して、この場所のブランド価値を活かそうと努めている。また、例えば軽井沢白樺高原教会の紹介文には「専任の外国人牧師が執り行う本格的挙式」いったフレーズが、石の教会 内村鑑三記念堂⁽⁶⁾の案内では「鑑三の“無教会思想”にオーガニック建築家が共感して誕生した」など、「外国人」が行い「本格的」であることや有名なキリスト者の影響を強調している。しかしこのように、直接あるいは間接に“本物のキリスト教”を示唆する理由はどのようなことに依拠したものだろうか。また、キリスト教との関係性を説明できなければ、軽井沢の結婚式会場としての訴求力が劣るのだろうか。たとえそうだとしても、軽井沢で挙式する非キリスト教信者にとって、そのことがどれほどの価値を持つものなのか。本稿では、こうした問を解読するために、軽井沢という街の変遷について、国際避暑地誕生と教会式結婚式に注目して知識整理する。

この研究では、以上のような問題認識に基づき、なぜ軽井沢がリゾートウエディングの地として多くの人々に選択されるのか、軽井沢における国際避暑地およびキリスト教の軌跡を通じて、その理由を明らかにする試みである。

(3) 本稿での暦年表示は、西暦に続きカッコ書きで元号を併記した。これは時代のイメージを促すことを目的としている。このような目的に合わないかと判断した、外国人に関する外国での活動・出来事と、太平洋戦争終結後の記述は西暦のみとした。

(4) 五十嵐太郎『結婚式教会の誕生』春秋社、2007年、183頁。

(5) 本稿で使う結婚式専用教会とは、キリスト教派に属さない、ホテルや結婚式専門式場に設けられた、結婚式を行うために設置された教会、チャペル、礼拝堂を指す。

(6) 中軽井沢（旧・沓掛）で星野リゾートが運営するホテルプレストンコート内に建つ結婚式教会。内村鑑三は無教会思想者であると明言しておきながら、建築家が共感したことを理由に教会を設置するというのは、鑑三の思いを否定することとならないのだろうか。

2. 高原都市・軽井沢の概要

長野県の東端、群馬県境に位置する軽井沢町は、浅間山（標高2,568メートル）の南東斜面、標高（海拔）900～1,000メートル地点に広がる高原の街である。東から南にかけて、鼻曲山、留夫山、矢ヶ崎山、八風山などの1,000メートル級の山々が控え、これらの山間を碓氷、入山、和美などの峠が結ぶ。最近の主要統計データは、人口19,953人（2013年12月）、面積156.05平方キロメートル、平均気温8.1℃、最高気温と最低気温の平均値はそれぞれ14.0℃、3.5℃（気温は長野地方気象台・平成24年）となっている。

現在の軽井沢町が形作られたのは1942（昭和17）年である。明治初期は中山道の宿場である浅間根越三宿（軽井沢、沓掛、追分）の他、塩沢新田、油井村、成沢新田、馬取萱村、発地村などが近在していた。これらは1889（明治22）年、西長倉村と東長倉村に再編される。そのうち東長倉村が1923（大正12）年に町制へ移行し軽井沢町となった。そして太平洋戦争開戦の翌年1942（昭和17）年に、西長倉村とその他一部を取り込んで現在の町の姿となった。次に軽井沢の街がどのような様子であったのか、三宿時代から事情を探る。

軽井沢一帯は、関ヶ原の戦のあと1602（慶長7）年に五街道が改修され、中山道の一宿として開かれた。東海道の箱根と並び難所として聞こえた碓氷峠を下った平地に軽井沢宿、湯川を渡った西に沓掛宿、北国街道の分岐点に追分宿が設けられた。1635（寛永12）年に参勤交代が制度化されると、北国、西国の大小30藩の大名がここを通るようになった⁽⁷⁾。当時の隆盛について「…舊幕時代に於ける軽井澤は、殆ど人馬織るが如く、驛路の鈴鳴絶ゆる時なく、堂々たる本陣脇本陣あり 其の他多数の旅宿あり。…これよりは碓氷の天険を攀ぶべき地點なるを以て、或は馬、或は籠、或は人の背によりて旅客並に荷物の運搬をなさざるべからざるが故に、此等の事を渡世の業となすもの、亦其の數多きを要し、甚だ隆盛を極めたるものなるは、盖し想像するに難からざる所なり。」⁽⁸⁾とあるように、急峻な碓氷峠を越える宿場町として中山道で最も栄えた宿場であった。

他方、この宿場町を囲む土地は、高冷地であることから粟、稗、蕎麦などの雑穀類がわずかに獲れる程度で、加えて浅間山の噴火による災害にもしばしば見舞われ、農民としての生活は厳しいものであった。つまり、この時代の軽井沢という街は、旅人が落とす路銀が生活を支えたということとなる。明治の新時代となり各種交通網の整備が進み、1884（明治17）年に碓氷新国道（現在の旧道）が開通すると、旧道を徒歩で往来する旅人は激減した。旧道沿いのこの宿場町は急速に衰退の一途をたどる。表1は明治維新後の交通網整備をまとめたものである⁽⁹⁾。たった10年の間に、一気に整備された感がある。そのように急がれた理由は、東京と関西を結ぶ動脈確保、あるいは太平洋側と日本海側を通す国策であったからである。こうした整備が、軽井沢の宿場としての地位を奪ったのである。

(7) 『軽井沢今昔物語』によれば、例えば加賀百万石前田家の道中は2,000人近くを引き連れた行列で、一晚泊するだけで2カ月分の水場があったという。（第一部駅傳時代の軽井澤、12頁）

(8) 長野県『維新以後の軽井澤小観』、1923年、3頁。

(9) 中安宏規『万平ホテル物語』万平ホテル、1996年、28-29頁。

表 1 軽井沢地域の交通整備の状況

1884年 5月	明治17	碓氷新国道 (現・旧国道18号線)	碓氷新道工事竣工。低い峠越えと道の拡幅により、人車のほとんどがこの道を利用することとなる
1884年 6月	明治17	高崎線開通 (日本鉄道)	上野～高崎間の鉄道全通
1885年10月	明治18	官営鉄道横川線 (信越線一部開通)	高崎～横川間の鉄道開通
1888年 9月	明治21	馬車鉄道開通	横川～軽井沢間の馬車鉄道開通。国道18号線上に線路を敷設し、馬匹2頭引きで運行
1888年12月	明治21	官営鉄道直江津線 (信越線一部開通)	直江津～軽井沢間の鉄道開通
1893年 4月	明治26	横川～軽井沢間鉄道開通 (信越線全通)	これにより、太平洋側（東京）から日本海側（直江津）を結ぶ動脈が確保された

軽井沢の変遷をまとめた大正時代の書では、この頃の惨状を「外に、櫛比した大厦高樓は空しく風雪に破れて礎を雨露に洒し、山を覆ひ野を埋めた松柏は皆薪に伐られて、地肌を露はすに至り、内には、家を連ねて或は倒産、或は離散、戸毎に悲劇が演ぜられた。」⁽¹⁰⁾と説明している。しかし、このような悲惨な状況が一変する出来事が起こる。「…「天道人を殺さず」と云ふか、「捨てる神あれば拾ふ神あり」と云ふべきか、軽井沢は人馬往來、陸續不斷、殷賑繁盛の昔に優るとも、劣らない好機會良氣運が新たに天來の如く出現した」⁽¹¹⁾のである。拾う神とは、軽井沢を避暑地として注目した外国人たちであるが、このことに関する詳説は後述に譲る。

避暑地として最適な土地であることを見出した外国人は、この地に別荘を持ち始める。続いて明治中旬以降、軽井沢がその名声を全国へ広げるのに歩調し、来軽者を受け入れる貸別荘やホテルが営業を開始する。明治時代は主に旧軽井沢⁽¹²⁾の周辺で個々に土地を求めて別荘が建てられていたが、時代が大正になると大規模な別荘地開発が始まり、それによって街が西へ拡大した。野沢源次郎が率いる野沢組と堤康次郎の箱根土地会社（のちのコクド）の別荘地開発が大きな要因である。1915（大正4）年に、野沢源次郎が離山のふもと一帯の約200万坪の別荘地経営分譲に着手する。源次郎は前年、医師に勧められて軽井沢で転地保養をして健康回復に自信を得、この体験から保養別荘地として開発すること

(10) 佐藤孝一『かるみざわ』国書刊行会、1987年、45頁。

(11) 『立志成功 佐藤万平君八十歳記念誌』佐藤万平私家版、1947年、12頁。なお同書は、佐藤万平と60年来の友人である東京文理科大学（現・筑波大学）中山久四郎教授が寄稿したものを、万平が知己に頼るために製本した線装本である。

(12) 旧中山道沿いでショーらが別荘を構えた地域のことを指す。

を着想した⁽¹³⁾。この別荘地は、大隈重信、細川護立、後藤新平、加藤高明らの財政界人をはじめ、軍人や学者、文士が土地を得て、その多くはあめりか屋⁽¹⁴⁾によって建てられた。

戦後は、夏の避暑のみに頼るのでなく冬期の観光客を誘致するべく全国に先駆けてアイススケートの発展に力を注いだ⁽¹⁵⁾。1952年には公設5リンクを新設したほか、私設のリンクも造成整備され、学生選手権大会の開催も誘致した。その後もリンク整備を進め、専用列車や専用バスなどの交通との連携も強化するなど努力を続け、世界スピードスケート選手権が開催された1963年にはアイススケーターを中心に冬季の観光客が50万人を超えた。また、日本に最も早くテニスが伝わったのは横浜であるが、1894（明治27）年には軽井沢でも旅館裏にテニスコートが作られたといわれている。このようにテニスの歴史が古い軽井沢にテニスブームが起こったのは、1957年の皇太子（現天皇）と正田美智子（現皇后）の軽井沢会テニスコートでの出会いによるものであった。このプリンスのロマンスを機に、日本全国、老若男女が軽井沢の名を知ることとなり、軽井沢会テニスコートは一躍「聖地」となった。このように戦後はアイススケートやテニスをはじめ、ゴルフ、スキーなどスポーツの街としての性格を強め、明治時代から色濃く受け継がれる避暑地の性格とが相乗し、様々な層の人々が訪れるようになった。続いて、前掲書で“拾ふ神”と表現された明治時代の外国人らが、なぜ軽井沢を拾ったのか見ていくこととする。

3. 国際避暑地を拓いた外国人宣教師

明治時代初頭の新しい交通網の整備とともに廃れ、寂れた軽井沢に、避暑地として光を当てたのは外国人であった。中でも英国国教会から派遣された宣教師ショーは最もよく見聞する名前であり、彼のことを「軽井沢の恩父」と呼ぶ。ショーが初めて軽井沢を訪れたのは1886（明治19）年4月であった。この地をよほど気に入ったのだろう。その年の夏には家族を伴って軽井沢を再訪し、借家して家族と避暑した。この滞在によって実見した軽井沢の夏の風土を、避暑地として最適であると確信し、在留欧米人に紹介して来遊を勧め、2年後の1888（明治21）年には自ら軽井沢で最初の別荘を建てた。この時期より、わが国のみならず広く東アジアに派遣された宣教師や外交官とその家族らが陸続とこの地に集うようになった。しかし、こうした彼らの行動は、気候に恵まれたばかりが理由ではなかった。当時の日本人と比べればそうでもないが、どちらかといえば経済的に豊かでない宣教

(13) 軽井沢の開発に外国人が関与したことから、この地に別荘を求める日本人はハイカラであり、建物のデザインもそうである必要がある。そこで野沢は、当時、東京で最新の洋風住宅会社であったあめりか屋と提携した。詳しくは以下を参照されたい。宍戸實『軽井沢別荘史』星雲社、1987年。

(14) 1909（明治42）年に橋口信助が東京・芝で開業したわが国最初の洋風住宅会社である。洋風住宅によって日本人の住生活を改善しようと、1916（大正5）年に住宅改良会を設立した。当時は住宅を専門とする建築会社が少なく、上流階級を中心に競って注文した。急こう配の切妻屋根が特徴のあめりか屋建築の別荘のいくつかは90年の時間を経て現存している。

(15) 軽井沢でスケートが行なわれたのは明治時代と早い。1914（大正3）年には軽井沢氷滑（スケート）会長である佐藤豊助軽井沢警察署長がリンクの増設を決めていることから、大正の初めにかけてスケート人口が増えたものと考えられる。また、1918（大正7）年には軽井沢氷滑大会が開かれたとの報道もあり、スケート競技への取り組みも早かったようである。詳しくは以下を参照されたい。小林取『避暑地軽井沢』樺、1999年。

に携わる人々が中心となり創られた避暑地には簡素さと清潔さがあり、また住民らが街の再興を企図して許した自治を彼らは善用した。こうして国際避暑地・軽井沢が誕生し発展するのであった。

3. 1. A.C. ショーの軽井沢訪問

英国国教会 (Church of England) の聖職者アレクサンダー・クロフト・ショー (Rev. Alexander Croft Shaw) は、1846年にカナダのトロントで生まれた。カナディアン・ショーと称されるショー家の家系は、スコットランド出身の英国陸軍少将であった曾祖父 (Major-General Shaw) が米国独立戦争後にトロントに移り住んだことに始まる。カナダは1867年に連邦国となるが、イギリス系の人々は祖国に誇りを持ち続けた⁽¹⁶⁾。ショーを英国人として紹介する資料が散見されるが、こうした出自やカナダの歴史が影響した誤解と思われる。

トロント大学トリニティ・カレッジで神学を修め、1872年英国へ渡り研修を重ね副牧師となった。そして、直後の1873 (明治6) 年に明治政府がキリスト教禁制を解くと、英国国教会派・聖公会牧師兼英国公使館付牧師として日本へ派遣された⁽¹⁷⁾。来日後、公使館付牧師の公職を続けながら、福沢諭吉の知遇を得て、福沢の子どもたちの家庭教師となる。併せて、福沢はショーのために自宅敷地内に西洋館を建て、1874 (明治7) 年から3年間は慶応義塾で英語とキリスト教教育の機会も与えた。1877 (明治10) 年に福沢の援助の基、東京・芝罘町 (芝公園3丁目) に敷地を購入し自宅を建築すると、2年後の1879 (明治12) 年6月にはレンガ造りの聖堂 (礼拝堂) を建てて聖アンデレ教会を創設した。そして、聖アンデレ教会を設計したド・ボアンヴィール (C.A.Chatel De Boinville) を介して鉄道技術開発者ポウナル (Charles.A.W.Pounal) と知り合う。このポウナルとの出会いが、ショーに軽井沢行きを決意させた。この時代にポウナルは、中山道に沿う鉄道建設のため高崎から名古屋まで実地調査を行った。その際に、軽井沢の清涼な気候に関心を持った。そのようなポウナルとの交流を通じてショーは軽井沢を知り、1886 (明治19) 年の訪問に至ったと考えられている⁽¹⁸⁾。

他方、英国公使館員が出版した旅行案内によって、ショーは軽井沢を知り訪ねた、とする説もある⁽¹⁹⁾。旅行案内の著者である英国公使館員アーネスト・メイスン・サトウ (Ernest

(16) 宍戸、前掲書、26頁。

(17) 英国公使館付牧師 (チャプレン) とは教会の組織機構の基本であるいわゆる教会においてではなく、特別な目的を持った諸団体 (学校、病院、軍隊、大 (公) 使館、各種企業など) に属する人びとのために働く聖職者である。本稿執筆に際し、ショーが公使館付牧師となった理由について日本聖公会軽井沢ショー記念礼拝堂司祭 土井宏純牧師に尋ねた。土井牧師は、明確な理由は不明であると前置きした上で、「1873 (明治6) 年に同職に任命され来日したショーは、教会の信仰と道徳に関する規定においては主教の下で働くと同時に、直接的に英国政府の指揮下においてその職務を執行するという二重の立場であった。今の言葉で言えば、英国公使をはじめ公使館スタッフや在留外国人 (特に英国人) の心の拠り所、カウンセラーとしての働きも担っていたこととなる。後にショーがビカステス主教によりアーチディーコン (大執事、副主教) に任命されていることから、教会行政の管理能力において秀でたものがあつたと想像される。公使館付牧師の任命権者であったグランヴィル外務大臣は、彼が非常に優秀で信頼に足る人物 (聖職者) であると評価していたため、この重責を担わせたのではないかと推察している。

(18) 宍戸、前掲書、26頁。

(19) 中安、前掲書、40頁。前出の土井牧師は、ショーの軽井沢来訪のきっかけについて「彼の広範な人脈に鑑

Mason Satow)⁽²⁰⁾は、幕末の1862(文久2)年に公使館の通訳として来日し、日本の開国に向けて日英の交渉役として活躍した。一度帰国した後、1870年(明治3)年に再来日を果たす。公使館員としての勤務の傍ら日本各地を旅行し、英国海軍退役士官アルバート・ジョージ・シドニー・ホース(A.G.S.Hawes)とともに1881(明治14)年に“A Handbook for Travelers in Central and Northern Japan”を出版した。この旅行案内は軽井沢を次のように紹介している⁽²¹⁾。「峠の頂上(4,050フィート)には数軒の家屋と熊野権現社がある。そこに立つと素晴らしい広大な景色が眺められる。…現在建設中の新しい道・碓氷道が完成すれば、江戸(Yedo)から馬車や人力車を利用してたった2日間の旅となる。海拔3,270フィート(約980メートル)の土地で夏の数か月とても涼しい。しかも嫌な蚊がないため、不健康な都会から避暑するには好適地である。村には快適に過ごせる宿も多く、周辺には多様な散歩道や登山道もある」。また、この地を“an uncultivated moor”という語で表現している。moorを辞書で調べると「イングランド北部やスコットランドの原野。土壌が悪いため農地に不適」とある。後に軽井沢を訪れた外国人が「…歐米人の思郷病を醫するの好恰地なりとしたり。」⁽²²⁾と思ったのも、このサトウの旅行案内が影響しているのではないだろうか。

街道有数の難所に鉄道を通すために動員された鉄道橋開発技師ポウナルと日英友好に貢献したサトウ。彼らが、聖アンデレ教会を建立した英国公使館付牧師と軽井沢について情報交換していた可能性は高く、これらの交わりが軽井沢行の決め手になったと推察できる。

3.2. 宣教師らの別荘での避暑生活

ショーに先立って外国人がここを訪れたことを記したが、彼がなぜ避暑地・軽井沢の発見者とされるのだろうか。その理由は、4月の軽井沢初訪問から間をおかず、夏に家族を帯同して「避暑生活」を始めたからである。旅人として“通った”あるいは“逗留”したのではなく、夏の避暑地として軽井沢に“住んだ”のである。

前掲書⁽²³⁾によれば、ショーは1886(明治19)年4月に軽井沢を訪ねて、山姿が風光明媚で空気は清澄かつ冷涼、また神気の爽快なることや、遊女がないことなどから「真に理想的避暑地なることを知りて歸京」したという。そしてその年の夏から、毎年軽井沢で避暑したのであった。その後1888(明治21)年に大塚山地区に別荘⁽²⁴⁾を建てるのであるが、

み特定は難しい」と言う。そうした前提で、「ショーが公使館付チャプレンであったこととサトウが英国聖公会の信徒であったことから、あえて言うとするれば、日常的な交流を通じてサトウから強く影響を受けた可能性が高いのではないか」と述べている。

- (20) 後の駐日公使。日本の歴史・文化に精通し、関係する数多くの論文を書いた。また、日本各地を旅行し、日記や旅行案内を詳細に残した。
- (21) 第2版(1884年)の229頁から始まる「ルート20. 碓氷峠から追分：浅間山」を参照した。なお、中安『万平ホテル物語』では、初版(1881年)を基に解説しているが、初版の入手ができず次善策として第2版を調べた。第2版の内容は初版とほとんど変わらないと中安(前掲書)39頁に記述がある。
- (22) 長野縣、前掲書、13頁。
- (23) 同上書、同頁。
- (24) 廃業した旅宿を洋風に改造した建物で、これが「洋風別荘」の原型となり、また避暑地の夏季居宅の最初の建築である。この建物は「ショーハウス」と呼ばれ、ショーの死後売却されてしまう。戦後まで幼稚園付属施設として使用された後、一度解体されるものの、1986年に軽井沢ショー記念礼拝堂の横に、軽井沢

それまでの2年の夏を過ごした借家は残され、日曜日にはここで礼拝が行われた。この建物こそが、軽井沢初のキリスト教礼拝所ということとなる。時間とともに礼拝に集まる人々が増え、独立した礼拝所を設置しようという声が上がると1895（明治28）年9月に献堂されたのが、現在の日本聖公会軽井沢ショー記念礼拝堂の原形である。間口5.4メートル、奥行10.8メートル⁽²⁵⁾の箱型木造平屋建、柿板葺切妻屋根、押縁下見板張り、どことなくショーが建てた洋風別荘に意匠が似ている。現存する建物の内部は、天井も内壁もなく屋根裏が丸見えで、小屋組みの簡素なものであるが、ややもすると粗末とさえ感じられる佇まいは宣教師ショーの自然の中での素朴な生活振りが偲ばれるようである。

ショーが避暑を始めた頃の軽井沢は、避暑客の多くが宣教師とその家族で占められた。彼らは「娯楽を人に求めずして、自然に求めよ」をスローガンに、夜の歓楽街の無い健康的な避暑地として軽井沢を好んだ。ショーの次男ノーマン・リマー・ショー（Norman Rymer Shaw）が残した回想記によれば、父親に連れられて近郊の離山へ出かけ、巨人の椅子と呼ばれた岩を登り、千曲川の岸辺でピクニックをして過ごしたという。ショーは大自然の中でのこうした暮らしを気に入り、軽井沢を「屋根の無い病院」と呼んだ。そして、その素晴らしさを内外の知人たちに知らせ続けた。やがて宣教師ばかりでなく、実業家や医師も軽井沢に別荘を建てるようになった。特に医師が、大都市の夏の悪い環境を避け、健康的保養の地として価値を認めたことにショーは喜んだ⁽²⁶⁾。この時より、軽井沢の曙光が夜の幕を切り落とされ、今日まで国際避暑地として130年の歴史を持つことになる。

作家室生犀星は、大正時代より作品執筆のため毎夏軽井沢に滞在した。犀星は1931（昭和6）年に、大塚山にはじめての自分の家を建てた。東京の自宅をその翌年に建てるが、本拠東京に先んじて夏2か月を過ごす別荘を設けたということは、それだけ犀星は軽井沢を好んでいたものと思われる。その犀星が昭和の初めに書いた随筆「山粧ふ その六 スコットランドの田舎」⁽²⁷⁾にショーに関する記述がある。

彼等の家族は先ず避暑の目的で間借をし、パンを焼き鶏卵を鍋の中で蒸して一夏を暮した。そのパンを焼いているそばに立って熱心に見ている男と、卵を鍋の中でころがしているのを見惚れている男が二人いた。その二人の人物はその翌年にショーが友人を誘うて来て粗末な丸太を削って別荘を建てた時分に、パンを焼くのを見ていた男はパンを焼き、卵焼きに見惚れていた男は卵と肉を焼いた。それからコーヒーや紅茶やキャベツの匂いが頹廢して再起できない、参勤交代の古い夢と奢りを寝物語にしていた、家々の軒をかすめた。

犀星が書いたように、外国人避暑客の滞在は地域産業へ影響を及ぼした。外国人らが軽井沢の別荘生活で困ったのは、肉と牛乳の保存であった。明治期の軽井沢は電気が通じていなかったため氷冷蔵庫を使っていた。軽井沢は冬の気温が低く、清涼な水も潤沢である

町の施設「記念館ショーハウス」として再建されている。

(25) 1922（大正11）年に、入り口が変更されるとともに、奥行18メートル、建物途中の幅が14メートル、俯瞰すると十字型に近い建物に改築される。

(26) 宍戸、前掲書、69頁。

(27) 室生朝子『父犀星と軽井沢』毎日新聞社、1987年、29-30頁。

ことから製氷に向いた土地であった。しかし、日本人は米・野菜と魚が主食であり、軽井沢のような山村では地元で獲れた川魚以外、魚はほとんどが塩漬けか干物であった。氷室を使って氷を夏まで保存する技術は古くからあり、それが地域の自然条件や食生活の違いと相まって、軽井沢の製氷業発展をもたらした。明治の末から大正にかけて製氷業は隆盛を極め、夏は貨車で東京へ氷を出荷した。外国人の避暑はこの他にも、食生活に関連して高原野菜の栽培、酪農・養鶏、住居に関連して別荘の家具に彫刻をしたことに始まる軽井沢彫りや、さらにテニスや野球などのスポーツに関わる産業発展に影響を与えたのである。

4. 教会結婚式の始まり

現在のわが国において主流となるウエディングスタイルは、ウエディングドレスを着てチャペルで結婚式を執り行うものである。ここでは、そうしたスタイルの確立に対し、軽井沢のキリスト教会が深く関与していたことを述べることにする。

堀辰雄は1923（大正12）年に、芥川龍之介、室生犀星らに招かれ初来軽した。大正から昭和初期にかけて多くの文士が軽井沢で創作したように、その後は辰雄もここで作品を書くようになった。辰雄は「風立ちぬ」「美しい村」など、軽井沢を舞台にした作品を数多く書いている。そうした作品群のなかで「木の十字架」⁽²⁸⁾では聖パウロ教会の名が具体的に記されている。

簡素な木造の、何處か瑞西の寒村にでもありそうな、朴訥な美しさに富んだ、何ともいへず好感じのする建物である。カトリック建築の様式といふものを私はよく知らないけれども、その特色らしく、屋根などの線という線がそれぞれに鋭い角をなして天を目ざしている。それらが一つになつていかにもすっきりとした印象を建物全体に與えているのもあろうか。——町の裏側の、水車のある道に沿うて、その聖パウロ教会は立ってゐる。小さな落葉松林を背負いながら、夕日なんぞに赫（かがや）いてゐる木の十字架が、町の方からその水車の道へはいりかけると、すぐ、五六軒の、ごみごみした、薄汚ない民家の間から見えてくるのも、いかにも村の教會らしく、その感じもいいのである。

現代のわが国はキリスト教式あるいは欧米のそのイメージに依拠した結婚式の人気が高い。このようなキリスト教結婚式が多数派となったのは1990年代後半からであり、それ以前は神前結婚式が一般的であった。キリスト教信者数が192万人（2013）と、人口のわずか1.5%ほどであることを考慮すると、現在主流のキリスト教結婚式は信仰の表明ではない。つまり、キリスト教結婚式の増加は、自覚的信仰の介在しない、しかし宗教儀礼の聖性を拠り所とした表現方法の交代ということとなる。われわれは、このキリスト教結婚式の普及に、軽井沢のキリスト教会が強く関与したと考えている。あるカトリック教会神父が、開かれたキリスト教をめざして非信徒の教会での結婚式を実施したことが、今日の

(28) 堀辰雄「木の十字架」『堀辰雄全集』第6巻幼年時代、角川書店、1964年、193頁。

状況を作り出すきっかけであったという考えである。そしてその教会こそが、聖パウロ・カトリック教会なのである。

4. 1. 聖パウロ・カトリック教会の設置

明治時代後期、夏の軽井沢のメインストリート（旧中山道）は横文字の看板や旗が立てられ、長いスカートにコウモリ傘といった外国人の散歩する姿が見られた。英語、ドイツ語、フランス語などが飛び交う風景をコスモポリタンと呼んだ者もいた⁽²⁹⁾。このように日本の中の異国であった軽井沢に対してステイタスを求めた政財界の実力者や、異国情緒に触れたい欧米留学あるいは海外旅行の経験者が集い始めた。彼らは単に贅を競うのではなく、キリスト教の礼拝、テニス、乗馬といった外国人との社交やスポーツにも熱心であった。こうした国内外の避暑客に対応するため、土地の人々の生活も変化していく。あるプロテスタント宣教師は日曜日になると商店を回り、安息日であるので店を閉めるよう説いた。日曜日の午前中は他家を訪問しない習慣が定着し、子供らが日曜学校に通うようになり、元来仏教徒であった人々がキリスト教に宗旨替えしていった。日本人キリスト者の増加を受けて1897（明治30）年、主に日本人が通う最初の教会として超党派の合同教会である日本基督教団軽井沢教会が開設された。そして1911（明治44）年には、この地で避暑する外国人旅客者数は6,600人にのぼり、日本人避暑客と合わせて12,000人以上が訪れた⁽³⁰⁾。

時代の下がった1930（昭和5）年、軽井沢を訪れたカトリック東京大司教区ワード神父は、逗留先であった軽井沢宿本陣跡に建つ軽井沢ホテルロビーに仮祭壇を設置して主日ミサを捧げるようになった。やがて、ホテルロビーでのミサでは飽き足らず、宣教の足場となる本格的な聖堂設置を志すようになる。神父は軽井沢ホテルが所有するホテル西脇の森を譲り受け、1935（昭和10）年に聖パウロ・カトリック教会ことカトリック軽井沢教会⁽³¹⁾を建てた。教会の設計は、敬虔なカトリック信徒のチェコ出身の建築家アントニン・レーモンド（Antonin Raymond）が行ない、彼は報酬を求めず奉仕によって取り組んだ。尊敬する師ワード神父から委任を受けたレーモンドは、設計のために敷地の森を幾度も注意深く観察し、高原の自然景観との調和を目指した⁽³²⁾。祖国チェコと生まれ育ったグラドノ地方の森に思いをはせ創作されたといわれるデザインは、現在も軽井沢のランドマークとなっている。

(29) 佐藤，前掲書，75頁。

(30) 軽井沢町経済観光課『軽井沢案内』，2013年，47頁。

(31) 本稿ではカトリック軽井沢教会を、広く知られ、一般に用いられている聖パウロ・カトリック教会と記す。ちなみに同教会のカルロス・マルティネズ神父の名刺も、横浜司教区に登録されたカトリック軽井沢教会でなく、「聖パウロ・カトリック教会」を用いている。

(32) 1919（大正8）年旧帝国ホテル（ライト館）設計監理のため、アメリカ人建築家フランク・ロイド・ライトとともに来日した。1921（大正10）年に日本に設計事務所を開設し、モダニズム建築の作品を多く残す。聖パウロ・カトリック教会の建築にあたっては、レーモンドの妻ノエミ夫人が切紙をガラスに貼りスタンド・グラスの代用物を制作したといわれている（宍戸，前掲書，228頁）。現存する作品は、カトリック目黒教会（1964年）、日本聖公会聖オルバン教会（1956年）などの宗教施設、聖心女子大学（1924年）、東京女子大学本館（1931年）、同大学講堂（1933年）などの学校建築、不二家ビル（1938年横浜・伊勢崎町）などの商業施設までである。

4.2. 教会結婚式の発祥地

キリスト教会での結婚式が世間に認識されるきっかけの1つとして、1972年の西郷輝彦と辺見マリの結婚式があげられる。神前結婚式が全盛の時代⁽³³⁾、人気絶頂のアイドル同士が、軽井沢のこのキリスト教会で結婚式を挙げた。その様子はテレビや週刊誌でも取り上げられ、静かな森の中にある教会の名が知られるようになる。西郷と辺見の結婚に相前後して、軽井沢に縁の深い作家・芥川龍之介の三男である芥川也寸志と江川マスミや、林隆三と青木一子、また森山加代子や吉田拓郎といったタレントたちがこの教会で結婚式を行った。タレントが挙げる結婚式の影響力は小さくなかった。昨年、軽井沢へ研究調査に行った際、半世紀以上に亘りこの教会に務めるカルロス・マルティネズ神父 (Carlos E. Martinez) のインタビュー機会に恵まれた。神父によれば、当時、同教会では多いときに1日7組、年間で500組以上の挙式が行なわれたという。しかし、ここで挙式した多くは、キリスト教に共感したのではなく、タレントと同じ場所で、同じような方法で結婚式を挙げたいと考えたカップルであった。聖パウロ・カトリック教会でのタレントの結婚式を通して、キリスト教式の結婚式が認知されるとともに、信仰心に拠らない、一種の憧れのような結婚式スタイルが確立したのである。

4.3. カテキズム⁽³⁴⁾と開かれたキリスト教の関係

元来、カトリック教会では、信徒以外の結婚式を執り行っていなかった。カトリックでは、結婚は叙階とともに「交わりと使命を育てる秘跡」として教会の7つの秘跡⁽³⁵⁾に列せられている。よって、聖パウロ・カトリック教会でも、何の制約なしに挙式できる訳ではない。「1. まえに離婚していないこと。」「2. 両親が賛成していること。」「3. 式に保証人が二人列席すること。」が結婚式を請ける条件となっている。用いている言葉は平易であるが、結婚の非解消性、結婚の同意、結婚の秘跡の挙行といったカテキズムを踏襲した内容である。また、条件としていないものの、式の前に神父から結婚に関する講習をうけることにもなっている。こうした条件をクリアして、晴れて聖パウロ・カトリック教会で結婚できるのである。

他方、この程度の条件で教会結婚式を行えることは、信仰を持った人々からすると不思議に思うことである。1990年にカトリック宣教司教委員会が主催して「宣教としての結婚式を考える」研修が開催された。非信徒の結婚式を教会で挙げる是非について、外国人神父を中心に神学的秘跡的にみて疑問があるといった意見が寄せられる一方、初めて教会

(33) 石井研士 (『結婚式 幸せを創る儀式』日本放送協会出版、2005年) は、全国結婚式場協会編『昭和・平成ブライダル総覧』(1992) や現在も調査継続中のゼクシィ調査を基に、1979年から2003年までの神前とキリスト教結婚式の変化を調べている。データのもっとも初期1979年では80%が神前式、15%がキリスト教式であった。その後の1990年代中頃の神前式とキリスト教式の比率逆転、その要因などを考慮すると、本稿で取り上げた1972年の西郷・辺見の挙式の時代、神前式スタイルが圧倒的シェアを誇っていたと考えられる。

(34) キリスト教の教導書である。カトリック教会ではカテキズムを教理教育の規範と考えている。

(35) 秘跡(サクラメント)は「イエス・キリストによって制定され、教会にゆだねられた、神の恵みを実際にもたらす感覚的しるし」(『カトリック教会のカテキズム要約』)のことである。カトリックでは「キリスト教入信の秘跡」(洗礼・堅信・聖体)、「いやしの秘跡」(ゆるし・病者の塗油)、「交わりと使命を育てる秘跡」(叙階・結婚)に分類している。なお、カトリックと聖公会が秘跡と呼ぶのに対して、プロテスタントでは「礼典」と称し、洗礼と聖餐(カトリックの聖体)のみを一般的に礼典としている。

に足を踏み入れる人々の多くが教会の雰囲気や神父の話に感銘するので、シンパシーを持ってもらう機会として有意であるとする声も多く挙がった⁽³⁶⁾。カトリック信徒でないことはもとより、カップル双方が非キリスト者同士の教会結婚式は、世界的にほとんど行われていないのである。

1971年に“日本司教協議会正式認可”の『カトリック儀式書 結婚式』が発行されている。序文によれば、第二バチカン公会議の決定に基づいてローマ儀式書の中の結婚式の改訂案が作成され、1969年7月をもって全世界で用いることが決まった。序文で日本語の式次第について、日本の結婚風習、それはすなわち神前結婚や仏前結婚の式典、西欧風俗の土着化、日本の感覚、キリスト教的結婚観と秘跡の恩恵に関する理解と表明、日本の教会で採用または許可されてきた付随的儀式や動作の再検討、非洗礼者との結婚が多いといった状況と課題について、神学、典礼、宣教、司牧の観点から考慮をしている、と明記している。こうした配慮の上で儀式書は作成され、1971年バチカンに認証手続きを取ったものである⁽³⁷⁾。この書では、「カトリック信者同士の結婚式はミサ中」、「カトリック信者とカトリック外の受洗者が結婚する場合には、ミサ無しの結婚式次第を用いる」と記述される。また、特に洗礼を受けていない人が多く式に列席する場合は、一般の人にとって理解しにくいミサを行うことは不相当だと指摘し、聖書朗読や祈願、説教などを吟味して列席者が理解しやすくすることが司牧と宣教上意味があると書いている。そして例外として、新郎新婦が強く希望する場合は、地区裁治権者の同意をもって「ミサ中の結婚式」と追記がある。ここまで述べて明白なように、少なくともこの儀式書が出版された1971年時点では、新郎新婦が非キリスト者であることは勿論のこと、少なくともどちらかがカトリック信者でない限り、カトリック教会で結婚式を挙げることはできなかったのである。

しかしわが国では、信徒数が拡大しない事情を考慮して、日本カトリック司教協議会が1975年に非信徒同士の結婚式の受け入れを「条件付き」で許可するようになった⁽³⁸⁾。キリスト教の中でもとりわけ厳格な宗派であるカトリックは、最高意思決定をバチカンがくだす。したがって、この日本カトリック司教協議会の決定に関しても、当然問い合わせている。聖パウロ・カトリック教会では、開かれたキリスト教の信念の基に非信徒の結婚式を受け入れ始めた当初、波風を立てぬよう密かに挙行していた。しかし、タレントの結婚式がマスコミを賑やかしたことを契機に、所属する横浜司教区に相談し、それが日本カトリック司教協議会の決定につながったという⁽³⁹⁾。このように、1975年にバチカンの教皇庁教理省が日本国内に限定してお墨付きを与えたのは、軽井沢の小さな森の教会の行動に起因するのである。

5. 結言

1987年に制定された総合保養地域整備法⁽⁴⁰⁾において、リゾートは「国民が多様な余暇

(36) 石井、前掲書、46頁。

(37) 典礼委員会『カトリック儀式書 結婚式』カトリック中央協議会、1971年、1頁。

(38) 石井、前掲書、47頁。

(39) カルロス・マルティネズ神父とのインタビューに基づく。

(40) 総務省、農林水産省他複数の官庁が所管する法律で、民間事業者の活用に重点を置いて総合的に整備する

活動を楽しめる場」と定義されている。他方、リゾート（resort）の語源は“re”, “sort”で、一定の規則に従って整列し直すという意味を持つ。心身を清涼な地で回復するために、人はリゾート地へ赴く。

日本各地に点在するリゾート地の多くは、明治時代初期の起原が多い。これらの地域は、わが国近代化の黎明期に、キリスト教宣教を目的に、あるいは政府の「お雇い技師・学者」として来日した外国人が、滞在する主要都市の高温多湿な夏を嫌い、わが国の豊かな自然に着目したことに始まる。当時の経緯は次のようにまとめられる⁽⁴¹⁾。明治維新前後の神戸で貿易業を営む英国人は六甲山を拓き、ローマ字開発で有名な J.C. ヘボン（James Curtis Hepburn）は日光で洋式リゾートホテル・金谷カッタージイン（のちの金谷ホテル）の開業を提案し、貿易港横浜の在留外国人は箱根を目指すなど、彼らは海拔1,000メートル程度の高原を求めた。しかし、神戸と大阪の大都市に近い六甲山は観光化が急速に進み、1881（明治14）年の段階で禿山化が問題となるほど乱開発されてしまう。また、金谷ホテルに続いてヨーロッパ各国の公使館所有の別荘地が建った日光は、華やかさをもって別荘地開発が行なわれた。そして箱根は、外国人専用の富士屋ホテルも存在し国際色豊かなものの、地域全体を通じて温泉地としてのイメージが強く、別荘も敷地内に数寄屋の茶室を設けて在宅で接待をすることが多かった。長野県がまとめた『維新以後の軽井澤小観』は、こうした地域は、その後日本人向け観光地として繁栄するに従って大衆化が進み、それとともに街は俗化していった、と厳しく表現する。

一方、軽井沢はどうであったのか。これまでの考察を通じて以下のことが明らかとなった。軽井沢は明治時代、外国人宣教師たちが東京をはじめとする都市部の不健康な夏を避暑して原型が生まれた。彼ら宣教師は、華やかさや騒がしさを好まず、娯楽を酒色に求めず自然に求め、自由平等に楽しみを共有するといった真にピューリタンのともいえる、素朴で簡易な別荘生活を送った。また、軽井沢の教会はタレントの結婚式を契機に教会で結婚式を挙げることを知らしめた。しかもそれが遠因となり、わが国では非信徒の結婚式が教会で執り行われるようになった。このように、軽井沢がリゾートウエディングの地として選ばれる理由は、国際避暑地としての発展やキリスト教会の活動などの独自の歴史や文化が強く影響しているのだと考えられる。

【謝辞】

本稿作成にあたって、多くの先輩研究者から厳しくも、暖かいご指導を賜った。また、日本聖公会軽井沢ショー記念礼拝堂司祭 土井宏純牧師、聖パウロ・カトリック教会司祭 C.マルティネズ神父には、研究のためのインタビューをご快諾いただき、知識修得とともに問題意識の醸成を大いに導いてくださった。記して感謝申し上げる。なお、本稿における誤りは、すべて執筆者の責に帰するものである。

ことを目指しバブル期の1987年に制定された。

(41) 桐山秀樹・吉村祐美『軽井沢という聖地』NTT出版、2012年、61-63頁。

[参考・引用文献]

- E.M.Satow, A.G.S.Hawes, *Handbook for Travelers in Central and Northern Japan*, Ganesha, 1884.
- アーネスト・サトウ (庄田元男訳) 『日本旅行日記1』 平凡社, 1992年。
- アーネスト・サトウ (庄田元男訳) 『日本旅行日記2』 平凡社, 1992年。
- 朝日新聞 (1974.10.22朝刊)
- 五十嵐太郎 『新宗教と巨大建築』 講談社現代新書, 2001年。
- 五十嵐太郎 『結婚式教会の誕生』 春秋社, 2007年。
- 石井研士 『結婚式 幸せを創る儀式』 日本放送協会出版, 2005年。
- 岩波書店編集部 『岩波写真文庫266軽井沢』 岩波書店, 1958年。
- 小川和佑編 『文壇資料軽井沢』 講談社, 1980年。
- 軽井沢町経済観光課 『軽井沢案内2013』 2013年。
- 軽井沢町誌刊行委員会 『軽井沢町誌・歴史編』 軽井沢町, 1988年
- 軽井沢文化協会創立50年記念誌編集委員会 『軽井沢120年 - 軽井沢文化協会創立50年』 軽井沢文化協会, 2003年。
- 軽井沢新聞社 『HISTORY of KARUIZAWA』 2013年。
- 桐山秀樹・吉村祐美 『軽井沢という聖地』 NTT 出版, 2012年。
- 小林収 『避暑地軽井沢』 樫, 1999年
- 佐藤孝一 『軽井澤今昔物語』 軽井澤観光文化協会, 1952年。
- 佐藤孝一 『かるみざわ』 (復刻版) 国書刊行会, 1987年。
- 佐藤万平 『立志成功 佐藤万平君八十歳記念誌』 私家版, 1947年。
- 宍戸實 『軽井沢別荘史』 星雲社, 1987年。
- 典礼委員会 『カトリック儀式書 結婚式』 カトリック中央協議会, 1971年。
- 長野県 『維新以後の軽井澤小観』 1923年。
- 中安宏規 『万平ホテル物語』 万平ホテル, 1996年
- 日本カトリック中央協議会常任司祭委員会 『カトリック教会のカテキズム要約』 カトリック中央協議会, 2010年。
- 堀辰雄 「木の十字架」 『堀辰雄全集』 第6巻幼年時代, 角川書店, 1964年。
- 室生朝子 『父犀星と軽井沢』 毎日新聞社, 1987年。
- 守部喜雅 『聖書を読んだサムライたち』 フォレストブックス, 2010年。
- 八木透 『日本の通過儀礼』 思文閣, 2001年。
- リクルートプライダグ総研 『ゼクシィ結婚トレンド調査2013-首都圏』 リクルートマーケティングリサーチ, 2013年
- リクルートホールディングス 『ゼクシィ国内リゾートウエディングガイド2013SUMMER & AUTUMN』, 2013年。

[抄 録]

リゾートウエディングは地域と大きくかかわりがあるが故に、地域と切り離してそれを語ることはできない。しかし、地域について考察しようとするれば、歴史、自然、社会、文化など、いくつもの要因を考慮しなければならないが、われわれの研究ではそこまで及ぶ状況ではない。本稿は、研究ノートとして、その一歩を踏み出すべく、リゾートウエディングが盛んな軽井沢に焦点をあて論攷するものである。

考察を通じて次のことが分かった。明治時代に軽井沢を再起させた外国人宣教師たちは、華やかさや騒がしさを好まず、娯楽を酒色に求めず自然に求めるなど、ピューリタンのともいえる、素朴で簡易な別荘生活を送った。また、軽井沢のキリスト教会が結婚式会場として教会の存在を知らしめ、それが遠因となり、わが国で非信徒の結婚式が教会で執り行われるようになった。こうしたキリスト教が深く関与する独自の文化や歴史が、リゾートウエディングの地として軽井沢を選ぶ理由として強く影響していることが示唆された。